

國學院大學學術情報リポジトリ

『玄奘三蔵絵』における異国想像に関する一考察：
庭石を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學大学院文学研究科 公開日: 2024-10-22 キーワード (Ja): 『玄奘三蔵絵』, 庭石, 異国想像 キーワード (En): 作成者: 王, 婕, Wang, Jie メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000962

『玄奘三蔵絵』における異国想像に関する一考察 —庭石を中心に—

A Study on the Foreign Imagination in *The Genjyo Sanzoue*:
Focusing on the Garden Rock

王 婕

キーワード：『玄奘三蔵絵』 庭石 異国想像

Key Words: *The Genjyo Sanzoue* Garden rock Foreign imagination

要旨

『玄奘三蔵絵』は唐代の高僧たる玄奘の生涯を描く絵巻で、全部で十二巻からなり、唐代の中原地区や西域地区、又は天竺の風景が細々描かれている。それは恐らく写実的な描写ではなく、一定の資料に基づき、上流階級の異国想像を反映している。本稿はその中に描かれた庭石を研究対象として、先ずは鎌倉時代の絵巻における庭石の特徴を分析し、日本本土や異国を舞台とする絵巻に描かれた庭石の特徴を明らかにした。次に『玄奘三蔵絵』における庭石を考察した結果、絵師たちは唐代の中原地区の風景をそのまま、或いは少し変容し、西域地区や天竺の風景に活用してきたことを明らかにした。続いて、典籍の記載を分析した結果、『玄奘三蔵絵』が作られた前に庭石を鑑賞する盛況が分かった。そして、白居易が詠じた太湖石が日本の貴族たちに与えた影響を明らかにした。更に、日本現存の絵画作品を考察した結果、絵師たちは太湖石を描く時、中国から日本に伝わった羅漢図の影響を受けた可能性が高いと推測した。最後に『玄奘三蔵絵』の構成上における庭石の役割を考察した結果、庭石は詞書の内容を補充する役割を担い、獅子状の庭石は象徴的な意味を持つと結論づけた。

Abstract

The Genjyo Sanzoue depicts the life of the eminent Tang Dynasty monk Xuanzang. With a total of twelve scrolls, it intricately depicts the landscapes of the Central Plains region and the Western Regions, and India. This may not be a realistic portrayal but rather based on certain sources, reflecting the upper-class imagination of foreign lands. This paper focus on the garden rocks depicted in *The Genjyo Sanzoue*. Firstly, an analysis of the characteristics of garden rocks in Japanese Kamakura period scroll paintings is conducted, defining the features of garden rocks in scrolls set in Japan or abroad. Secondly, an analysis of the garden rocks in *The Genjyo Sanzoue* reveals that the artists slightly modify the landscapes of Tang, incorporating them into the settings of the Western Regions and India. Subsequently, this paper analyzes the ancient codes and records to clarify the admiration of garden rocks by Japanese nobility before the

creation of *The Genjyo Sanzoue*. It also highlights the influence of Bai Juyi's poems of Taihu stones on the Japanese upper-class. Furthermore, by analysing existing Japanese paintings, it is speculated that the artists may have been influenced by the paintings of arhats transmitted from China to Japan. Lastly, the garden rocks in *The Genjyo Sanzoue* serves to complement textual content, with lion-shaped garden rocks bearing symbolic significance.

はじめに

『玄奘三蔵絵』（藤田美術館蔵）は唐代の高僧たる玄奘の生涯を描く絵巻で、全部で十二巻があり、七十六段からなっている。成立年代は十四世紀初頭だと考えられている。現在判明していることは、前半の絵師は高階隆兼で、後半の絵師は隆兼グループに所属する他の画家で、『春日権現験記絵』と同じ頃の成立となる⁽¹⁾。また、詞書の書写は複数の人物に関わっており⁽²⁾、大部分の内容は玄奘の弟子慧立・彦惊によって著された伝記『大慈恩寺三蔵法師伝』（以下は『慈恩伝』）をもとに制作されている。続いて、本研究における「異国」は実存していた日本以外のところを指し、主に唐代の中原地区や西域地区、天竺のことである。「異国想像」は唐代の中原地区や西域地区、又は天竺に対する想像である。また、庭石について、李樹華氏が「庭石は庭園における捨石あるいは石組を構成する石を意味し、また、中国においては独立した怪石、あるいは假山を構成する石を意味する」⁽³⁾と述べている。外村中氏が「奇怪な形態をした庭石の最も代表的なものが太湖石である」⁽⁴⁾と述べている。つまり、中日両国において庭石の姿形や置き方は多少異なるが、景観用の石として庭に置かれる点が同じである。本研究の研究対象は『玄奘三蔵絵』に描かれた庭石である。その中に、太湖石もあり、独特な形をしている庭石もある。

藤田美術館蔵の『玄奘三蔵絵』以外に、旧本があるかどうかの問題をめぐり、長年論議されたが、現存資料が不十分な故、断定できないのが現状である。その

(1) 小松茂美等、続日本絵巻大成9『玄奘三蔵絵』下、中央公論社、1982、pp. 134-135。

(2) 野村卓美、解脫房貞慶と『玄奘三蔵絵』——貞慶作『中宗報恩講式』をめぐって、文芸論叢／大谷大学文芸学会編、2009（73）。

(3) 李樹華、中国における庭石と盆石の鑑賞法の形成とその定着について、ランドスケープ研究、1996、59（5）。

(4) 外村中、明末清初以前の中国庭園における太湖石について、ランドスケープ研究、1995、59（1）。

ため、本稿の考察は全て現存本の藤田美術館蔵『玄奘三蔵絵』を中心に行うより仕方がない。

この絵巻に描かれた庭石に関する先行研究として、加藤悦子氏は「当巻に見られる獣形の奇岩は、制作者の単なる空想の産物ではなく、言語テキストとしては『大唐西域記』に、視覚的テキストとしては羅漢図にその発想を得て描き込まれたものと言えるのではないか。」⁽⁵⁾と述べている。高陽氏はナランダー寺の泉殿に立っている石について、「正面は象で、右側が水牛、左側は獅子であり、反対側は見えないがおそらく馬であることは確実であろう。それは『大唐西域記』やハーバード本で見てきた無熱池の形象そのものである。」⁽⁶⁾と述べている。楊曉捷氏は「太湖石など唐的な風景を天竺、ひいては浄土のそれに見立て、実際に赴きえない世界への憧れをそれらによって十分に満たしたことである。」⁽⁷⁾と指摘している。

しかし、獣形の奇岩以外に、伝統的な形をしている太湖石も幾つか描かれている。太湖石などの庭石は運びにくいもので、実物より何を基に描くか。続いて、鎌倉絵巻において、庭石は異国の場面だけ現れるか否か、また、『玄奘三蔵絵』において、唐代の中原地区や西域地区、又は天竺に描かれた庭石の特徴や区別は何であるか、更に、なぜ庭石を一つの異国風景として描かれたかなどの問題について、まだ十分検討されていない。そのため、本稿は先行研究の成果を踏まえながら、新しく公開された資料を取り入れ、以上の問題を中心に論じていきたい。

一、鎌倉絵巻における庭石

鎌倉時代は絵巻の時代だと言われ、数多くの優れた絵巻が誕生した。筆者が調査した限り、日本を舞台とする絵巻において、家のすぐ近くに巨大な庭石はほぼ見当たらず、家の縁側より高い庭石は減多に見えない。例えば、『石山寺縁起』巻七第一段(図1)のように、庭石は縁側より低く、周りに木が植えられている。また、『一遍上人絵伝』巻三第二段(図2)のように、庭石は造景の一環として数多

(5) 加藤悦子。鎌倉時代末期に於ける宮廷絵所の研究：[博士学位論文]。東京大学，1994。

(6) 高陽。天竺「無熱池」の説話と図像：『大唐西域記』から『日本須弥諸天図』『玄奘三蔵絵』へ。日本文学/日本文学協会編，2019, 68 (7)。

(7) 楊曉捷。絵巻の表現様式への一試論——『玄奘三蔵絵』における漢文学の参与を手掛りにして。文学，2001, 2 (5)。

く置かれ、その上に橋が架かっている。その中に、大部分の庭石が縁側より低い。

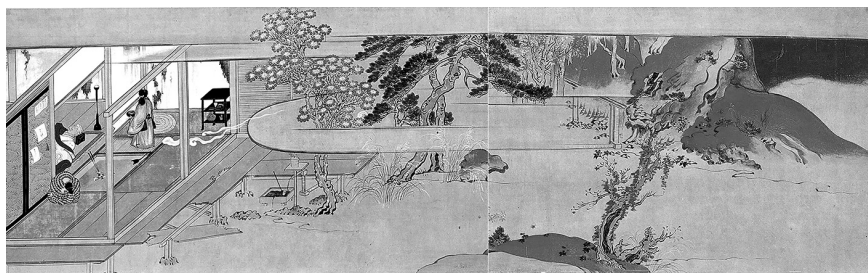


図1 『石山寺縁起』巻七第一段

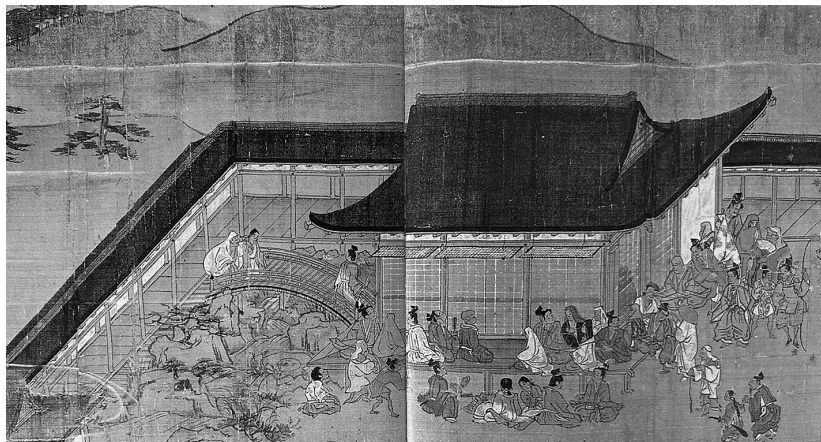


図2 『一遍上人絵伝』巻三第二段

また、庭に造景としての小川があり、小川の流れに応じて、いくつかの庭石が点在している場合が多い。これらの庭石は、いずれも家の縁より低いもので、泉石の風流を作り出すために、欠かせない存在である。例えば、『北野天神縁起』承久本の巻一第一段（図3）と同絵巻巻三第三段（図4）に描かれたように、庭には小川が流れて、その左右に庭石が置かれている。『玄奘三蔵絵』と同じ絵師グループによって描かれた『春日権現験記絵』も、図5と図6のようで、上述した絵巻に描かれた庭石と同じ特徴を持っている。

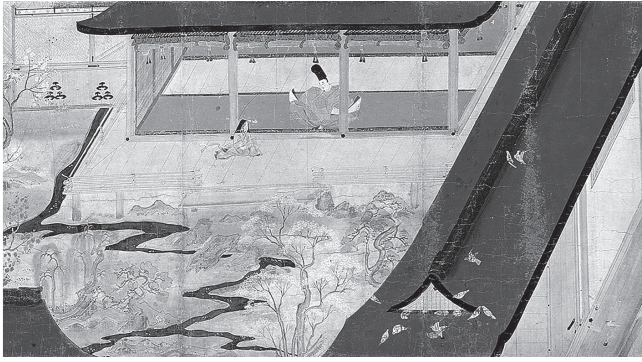


図3 『北野天神縁起』 承久本 卷一第一段

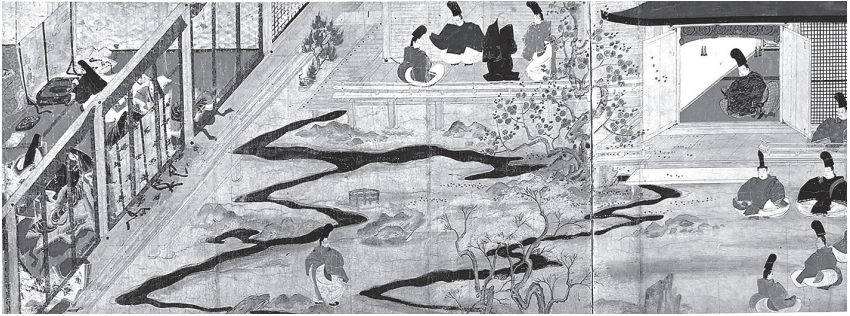


図4 『北野天神縁起』 承久本 卷三第三段

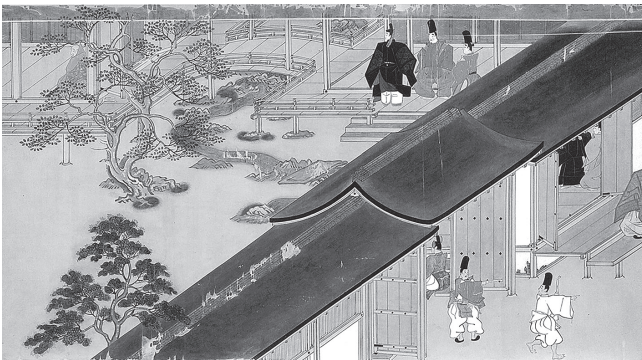


図5 『春日権現験記絵』 卷三第三段



図6 『春日権現験記絵』巻五第二段

更に、十一世紀に成立した造園秘伝書『作庭記』には、「凡滝の左右、嶋のさき、山のほとりのほかは、たかき石をたつ事、まれなるべし。中にも庭上二、屋近く三尺にあまりぬる石を、立つべからず。これををかしつれば、あるじ居とゞまる事なくして、つひに荒廢の地となるべしといへり。」⁽⁸⁾とあり、家屋の近くには三尺を超える石を立ててはならない。もし置かれたら、人はこの場所に長く住むことができず、遂に荒地となる。三尺は約1メートルで、要するに、庭に1メートルを超える石を立ててはならない。『作庭記』の言い方と一致し、絵巻においても、日本本土の庭石を描く時、巨石はほぼ見当たらず、大部分の庭石は縁側より低い。ところが、異国を舞台とする絵巻に庭石はどのように描かれたのか。

鎌倉時代では、日本を舞台とする絵巻以外に、異国を舞台とする絵巻も数多くある。『玄奘三蔵絵』を除いて、『華嚴宗祖師絵伝』『東征伝絵巻』『高野大師行状図画』（地藏院蔵）入唐の部分などがある。これら絵巻においても、庭石の姿がしばしば登場する。

『華嚴宗祖師絵伝』において、登場した庭石はいずれも典型的な太湖石で、図7のような人の身長のごく二倍ぐらいの太湖石が置かれている。それは『作庭記』に記載された作法によって置かれるのではなく、それと逆にして、禁忌を犯しているとも言える。家やお寺（図8）のすぐ近くに置かれ、周りに花が植えられ、豪華絢爛の様子をしている。また、『東征伝絵巻』（図9）や『高野大師行状図画』

(8) 林屋辰三郎校注、『日本思想大系』23『古代中世芸術論・作庭記』。岩波書店、1973、p. 226。



図7 『華嚴宗祖師絵伝』義湘絵 第二巻 善妙の府邸

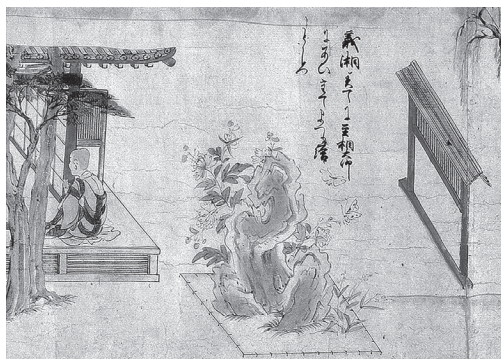


図8 『華嚴宗祖師絵伝』義湘絵 第二巻 至相寺

(図10、11)において、庭石も同じく部屋のすぐ近くに立たれ、細部をよく観察すると、穴が幾つかあり、より小さい太湖石だと考えられる。更に、『高野大師行状図画』の庭石の傍に芭蕉が描かれている、このような組み合わせは『玄奘三蔵絵』にもみられる。

つまり、異国を舞台とする絵巻において、庭石は小川の両側ではなく、家のすぐ近くで単独的に置かれた場合が多いようである。また、石の高さも高低に拘わらず、穴がある太湖石を目立たせるように描いている。

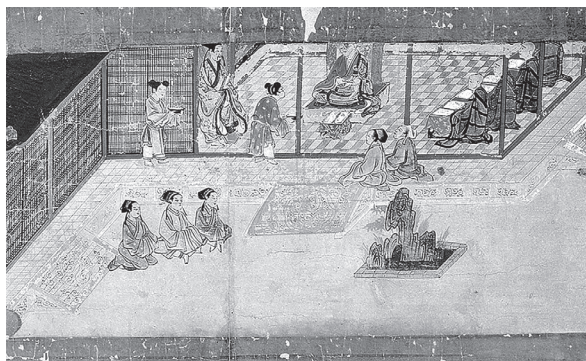


図9 『東征伝絵巻』巻三第五段



図10 『高野大師行状図画』(地藏院蔵) 第二 五筆和尚号事

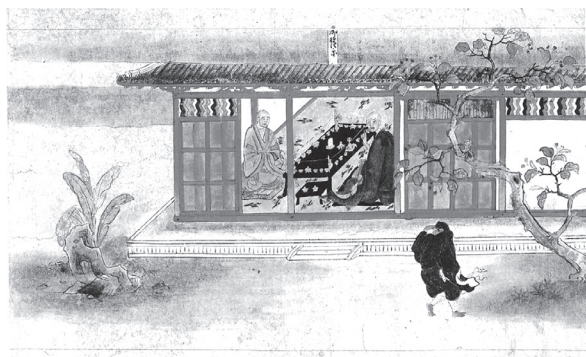


図11 『高野大師行状図画』(地藏院蔵) 第三 守敏遣護法事

二、『玄奘三蔵絵』における庭石

筆者の統計によると、全十二巻の中に、絵画の部分では、庭石が表1の通り、十六回も登場している。その中に、典型的な太湖石もあり、獅子のような形の庭石もある。それに対して、詞書と『慈恩伝』では「太湖石」「庭石」などの描写が見当たらない。

表1『玄奘三蔵絵』における庭石の場面

巻一	第一段 少年玄奘、『孝経』を学ぶ。 第四段 須弥山の夢を見る玄奘。
巻二	第六段 高昌国王、玄奘に滞留を強請する。
巻三	第二段 亀茲国王の府邸。 第六段 梵衍国の寺院の外。
巻四	第三段 迦湿弥羅国のフシュカラ寺の僧房に老僧は貴僧到来の夢を見る。
巻六	第二段 玄奘がナーランダー寺で山海珍味を食べる。 第七段 玄奘が正法蔵の講義を受ける。
巻七	第三段 ナーランダー寺でシムハラシュミ大徳との講義。 第五段 戒日王の手紙を読む正法蔵、玄奘は小乗僧との対決を決意した。
巻十	第四段 長安、新経書写の場面。
巻十二	第六段 最後に、韋駄天降臨の場面。

庭石を描く場所は順序で「父・陳慧の府邸→高昌国（獅子頭の形）→亀茲国王の府邸（石の上に木が植えられる）→梵衍国の寺院の外（御手洗の形をしている庭石）→迦湿弥羅国のフシュカラ寺（太湖石と芭蕉）→ナーランダー寺（六箇所）→長安（二箇所）」である。唐代の中原地区以外に、西域地区や天竺も庭石の姿が見られる。また、それは全部家のすぐ近くに置かれ、明らかに『作庭記』の記載した様式と違い、亀茲国王の府邸に置かれた庭石以外に、高さは全部階段より高い。

更に、庭石の姿形から見れば、中原地区において描かれた庭石は巻一第一段（図12）、巻十第四段（図13）及び巻十二第六段（図14）の三箇所に現れ、いずれも典型的な太湖石の様子をしている。それに対して、西域地区に描かれた庭石は迦湿弥羅国を除いて、全部変わっている。その中に、巻二第六段（図15）の高昌国王府邸に描かれた庭石は口を大きく開いている獅子頭の様子をしている。巻第三



図12 『玄奘三蔵絵』 卷一第一段

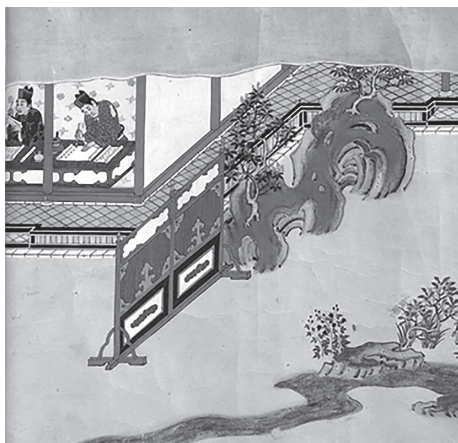


図13 『玄奘三蔵絵』 卷十第四段



図14 『玄奘三蔵絵』 卷十二第六段

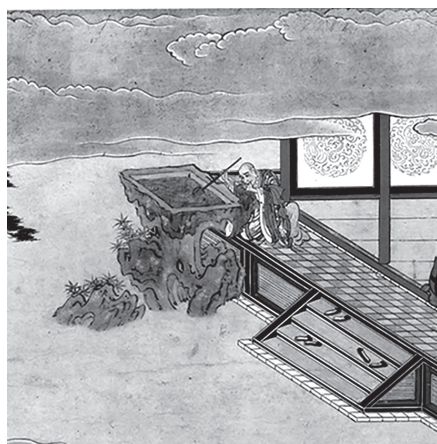


図17 『玄奘三蔵絵』 卷三第六段

二段(図16)の亀茲国王の府邸に描かれた庭石は丈が低く、その上に木が植えられている。また、卷三第六段(図17)の梵衍国の寺院の外に描かれた庭石は神社の御手洗の機能を持ち、実用化されている。ここから、絵師たちは明らかに西域地区の風景を中原地区の風景と描き分けていることが窺える。

ところが、天竺のナーランダー寺の場面において、庭石は六箇所も描かれてい

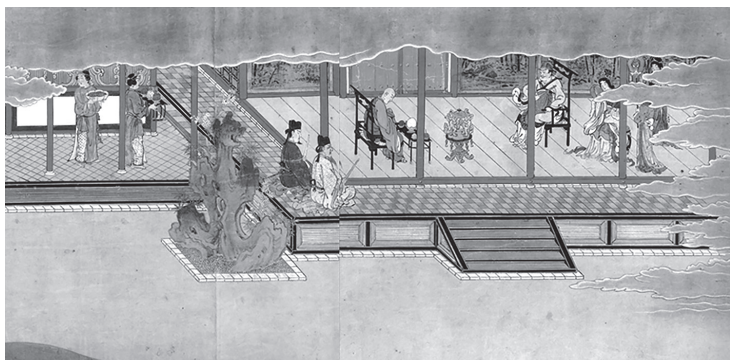


図15 『玄奘三蔵絵』巻二第六段

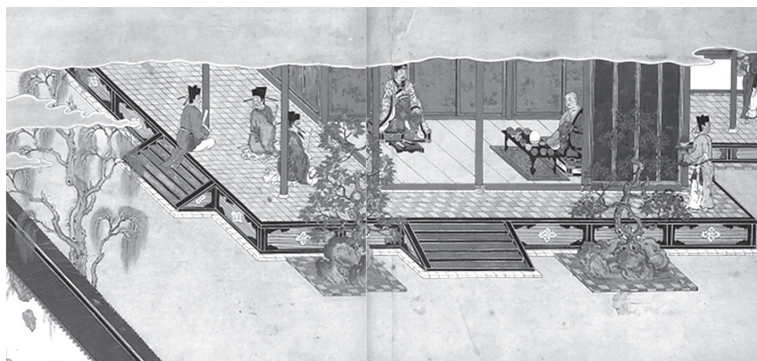


図16 『玄奘三蔵絵』巻三第二段

る。その中に、巻六第二段(図18)、巻六第七段(図19)、巻七第三段(図20)、巻七第五段(図21)の四箇所描かれた庭石はいずれも典型的な太湖石で、他の二箇所は獅子の形(図22)と四方獸頭(図23)の形をしている。つまり、聖地天竺に描かれている庭石は中原地区の太湖石以外に、独特な形をしている庭石もある。

異国の風景は多くあるが、絵師たちはなぜ庭石をこれ程工夫して描いてきたのか。それはおそらく、絵巻の制作者と享受者たちの共通認識に関わり、彼たちの異国に対する想像をある程度で反映している。いったい庭石は享受者たちの生活にどのように関わっているのか。その共通認識はどのように形成されたのかは、典籍と絵画を踏まえながら、分析しなければならない。



図18 『玄奘三蔵絵』 卷六第二段



図19 『玄奘三蔵絵』 卷六第七段

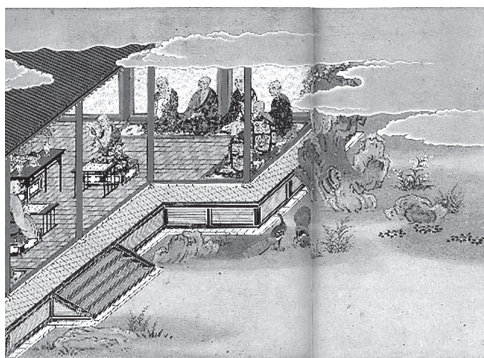


図20 『玄奘三蔵絵』 卷七第三段



図21 『玄奘三蔵絵』 卷七第五段



図22 『玄奘三蔵絵』巻六第七段



図23 『玄奘三蔵絵』巻六第二段

三、異国想像としての庭石

まずは典籍に記載された庭石について分析する。

中日両国において、石を鑑賞する風習は長い歴史を持つ。中国の歴史を遡って見ると、石を鑑賞する風習は山岳信仰から始まる。李樹華氏が「秦の始皇帝は長生不死を求めるため、大臣を派遣して渤海の中に神山と神薬を探し求める一方、宮廷苑圃に三神山を建造した。また、漢の武帝は建章宮未央殿の北側に大きい池を作った。池の中に蓬萊、方丈、瀛洲および壺梁などの仙山がある。漢代から、「一湖三山」の内容と構成は中国園林の伝統的な手法になってきた。……（中略）唐代以降、庭石と盆石は盛んに用いられていた。その中に、最も有名なのは太湖石である。中国における石の鑑賞法は、最初に太湖石から成立したと推測される」⁽⁹⁾と述べている。つまり、太湖石は一番有名な庭石として、唐代から鑑賞されてきた。

『玄奘三蔵絵』に登場する庭石の大部分はいわゆる「太湖石」で、『大辞林』によると、太湖石は「中国太湖に産する石灰岩で、浸食による奇形を珍重して、庭園や植木鉢などに置く」。「疊山置石」は中国の古典庭園史と切り離すことはできず、

(9) 注3と同じ。

古来から最も一般的に使用されているのは太湖石である。⁽¹⁰⁾ その発見者は白居易だと言われ、歴史書にも、多くの記載が残されている。『旧唐書』の「白居易伝」には、「罷蘇州刺史時、得太湖石五、白蓮、折腰菱、青板舫以歸、又作中高橋、通三島逕。」⁽¹¹⁾ が記載され、蘇州から辞官するとき、白居易は太湖石を五つもらい、庭作りに用いられたという。宋代になると、太湖石を鑑賞する風習が更に流行し、宋徽宗の時期に全盛期を迎えた。『統資治通鑑長編拾補』卷四十七には、「宣和五年、平江府朱勔造巨艦、載太湖石一塊至京、以千人舁進、是日、賜銀椀千、並官其家僕四人、皆承節郎及金帶。」⁽¹²⁾ が記載されている。巨大な太湖石を運ぶために、人力を千人以上費やした。後の時代においても、太湖石を鑑賞する風習は雅趣として引き続いてきた。

歴史書以外に、太湖石は詩人たちにも愛誦されてきた。白居易をはじめ、劉禹錫、吳融、皮日休、陸龜蒙、梅堯臣、葉夢得などの詩人達も数多くの漢詩を残している。白居易の「太湖石記」に「……或委海隅、或淪湖底。高者僅数仞、重者殆千鈞。一旦不鞭而來、無脛而至、爭奇騁怪、為公眼中之物。公又待之如賓友、視之如賢哲、重之如宝玉、愛之如兒孫。……」⁽¹³⁾ とある。ここから、太湖石の高さと重さ、また文士たちはどれぐらい太湖石を愛着するかが窺える。その他、「太湖石」という詩に「遠望老嵯峨、近觀怪嶽峩。纔高八九尺、勢若千万尋。嵌空華陽洞、重疊匡山岑。……」⁽¹⁴⁾ とある。比喩の手法で重畳たる太湖石を描き出した。更に、「双石」に「……結從胚渾始。得自洞庭口。万古遺水濱。一朝入吾手。……」⁽¹⁵⁾ とある。ここで太湖石の由来を紹介し、註解⁽¹⁶⁾によると、「洞庭」は「太湖洞庭」であり、太湖の東南に位置する洞庭山を指す。そして、吳融の「太湖石歌」に「洞庭山下湖波碧。波中万古生幽石。鉄索千尋取得来。奇形怪状誰能識。……」⁽¹⁷⁾ とある。つまり、太湖の東南に位置する洞庭山は太湖石の名産地で、そ

(10) 刁慧琴、『中国太湖石』、上海科学技術出版社、2008、p. 4。

(11) 劉昫等撰、『旧唐書』卷一百六十六「白居易伝」、中華書局、1975、p. 4354。

(12) 黄以周等輯注、顧吉辰點校、『續資治通鑑長編拾補』卷四十七、中華書局、2004、p. 1454。

(13) 白居易著、謝思煒校注、『白居易文集校注』「太湖石記」、中華書局、2011、第1版、p. 2060。

(14) 白居易著、謝思煒校注、『白居易詩集校注』卷第二十二「太湖石」、中華書局、2006、第1版、p. 1769。

(15) 白居易著、謝思煒校注、『白居易詩集校注』卷第二十一「双石」、中華書局、2006、第1版、p. 1678。

(16) 注15所引の語注より。

(17) 彭定求等編『全唐詩』卷六百八十七「太湖石歌」、中華書局、1960、第1版、p. 7898。

こから採った太湖石が奇怪な形をしている。

丹羽鼎三氏が「日本においては、最古の詩集『懷風藻』に収むる詩篇によって推量するに、遠く奈良朝の代に、既に庭園に石を配置したことが認めらる。降って、平安朝に入っては、先づ神泉苑（平安期の初期）、藤原冬嗣の閑院（弘仁年間）、藤原時平の水石亭（延喜年間）等に、「疊石」又は「立石」のあったことの記録が存して居る」⁽¹⁸⁾と述べている。ここから、日本における庭石の歴史は奈良時代に遡ることができる。

文献資料において、異国を舞台とする物語に庭石に関する描写がある。『浜松中納言物語』に「三の皇子は、内裏のほとり近く、河陽県といふところに、おもしろき宮造りして、……水の色、石のたたずまひ、庭のおも、梢の景色もいみじうおもしろし」⁽¹⁹⁾と書いて、想像上の河陽県というところで、美しい宮殿の中に庭石がある。庭石に対する具体的な描写は見当たらなかったが、異国風景の一つの要素として挙げられている。

更に『本朝文粹』巻第一に菅原文時が書いた「織女石賦」があり、「山兮有石、漠也有星。一入工夫之意、自成織女之形。其體是奇、如見天潢之曲。其身可轉、猶立昆池之汀。……（中略）不言而來、遠別洞庭之岸。……」⁽²⁰⁾この賦は織女の様子をしている奇石を詠じ、自ら織女の形をして、身なりが美しく飾り整えている。註解⁽²¹⁾によると、「遠別洞庭之岸」は明らかに白居易の「双石」に描かれている太湖石のことを意識しながら詠じた句である。つまり、日本の貴族たちは庭石を描いている時も、つねに白居易の漢詩を用いながら、太湖石の姿を連想して詠じている。

続いて『江談抄』第三に「致忠買石事」という記載があり、「……備後守致忠元方男。買閑院為家。欲施泉石之風流。未能得立石。則以金一兩買石一。件事風聞洛中。件事為業之者伝聞此。争運載奇巖庭石以至其家欲売。爰致忠答云。今者不買云々。売石之人則抛門前云々。然後撰其有出風流者立之云々。」⁽²²⁾ここから、貴族たちは立石を好み、ありったけの知恵を絞り、入手したい気持ちがよくわかる。

更に、『明月記』嘉祿二年（1226）五月六日条に「川を掘り、潺湲を構ふるの間、

(18) 丹羽鼎三。日本の庭石に就いて。園芸学会雑誌, 1931, 2 (1)。

(19) 池田利夫校注・訳。『新編日本古典文学全集』27『浜松中納言物語』。小学館, 2001, p. 35。

(20) 柿村重松註。『本朝文粹註釈』上冊。内外出版, 1922, p. 23。

(21) 柿村重松註。『本朝文粹註釈』上冊。内外出版, 1922, p. 24。

(22) 塙保己一編。『群書類従』第十七輯巻第四百八十六『江談抄』。経済雑誌社, 1902, p. 586。

具実卿勅定と称して、二条大宮の泉に入り、奇岩庭石を盗み取ると云々。」⁽²³⁾とある。ここから、庭石を風流の象徴として、貴族たちの間に流行し、盗難まで引き起こったことがわかる。

要するに、『玄奘三蔵絵』が作られた前に、貴族たちの間では庭石を鑑賞する風習はもうかなり広がった。そして、彼たちは奇岩を詠む時も、白居易が描いた太湖石を意識し、異国の庭石に対する好奇心が高まることも合理的である。ところが、太湖石などの庭石の実物は日本に伝わる可能性がほぼないため、絵師たちはどのように貴族たちの期待感を応えるか。

次は絵画資料を中心に分析する。

中国において、現存資料から推測すると、画かれている庭石は唐代に遡ることができる。上海博物館蔵の「高逸図」(図24)が竹林七賢の四賢を描いている。その背後に庭石も織り交ぜ、雅な気骨を表している。その他、周昉の『簪花仕女図』においても庭石の姿が見られる。また、2000年に河南省安陽市で唐代の墓室壁画が発見され、その中に、図25と図26のように、明らかに太湖石が描かれている。その周りに、鳥や草木が描かれている。

この点では、唐代から、太湖石をはじめとする庭石はすでに一つの重要な画題になった。宋の時代になると、この風習は更に広がり、北宋の蘇漢臣や宋徽宗趙佶、南宋の劉松年などの画家が残された絵画作品にも庭石がしばしば登場する。

さて、数多くの中国の絵画作品に庭石が描かれているが、『玄奘三蔵絵』などの絵巻は実際に何を基に描くかは、日本現存の絵画作品を基に分析しなければならない。

奈良時代に遡って見ると、正倉院南倉125番の宝物である雑楽桑木阮咸第1号の捍撥の表には、隠士たちが碁を打つ場面が描かれている(図27)。よく観察してみると、隠士たちの左右や前には、太



図24 孫位・高逸図(部分) 上海博物館蔵

(23) 藤原定家著、今川文雄訳、『訓読明月記』第四卷、河出書房新社、1978、p. 188。



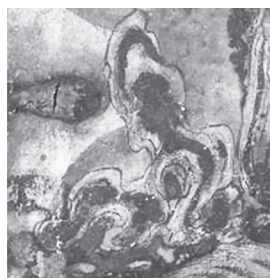
図25 河南省安陽市北関の唐代壁画
墓室西壁右側の壁画(局部)



図26 河南省安陽市北関の唐代壁画墓室
西壁左側の壁画(局部)



(左) 図27 桑木阮咸 捍撥の部分



(右上) 図28 桑木阮咸 捍撥の部分(左拡大図)



(右下) 図29 桑木阮咸 捍撥の部分(右拡大図)

湖石みたいな岩石が描かれている(図28、29)。隠士と太湖石の組み合わせの点において、それは孫位の「高逸図」と似ている。また、同じく奈良時代に成立した蓮台寺本の『絵因果経』(図30)においても、人の身長と同じぐらいの太湖石が

描かれている。しかし、それらの絵画作品の創作時代は『玄奘三蔵絵』からかなり遠い、直接的な影響を受けたことは言い難い。

また、先行研究が「当巻の造形を考える上で、羅漢図というものがかなり重要な位置を占めていることが推測される」⁽²⁴⁾と指摘している。筆者の調査によれば、日本の現存している羅漢図の中に、南宋の周季常、林庭珪が描き、鎌倉時代に日本に伝わった「大徳寺伝来五百羅漢」四十九番の羅漢図



図30 「絵因果経」蓮台寺本



図31 「大徳寺伝来五百羅漢」49



図32 金大受 十六羅漢図 十一尊者

(24) 加藤悦子、鎌倉時代末期に於ける宮廷絵所の研究：[博士学位論文]、東京大学、1994。



図33 東福寺 五百羅漢図 三号(拡大図) 図34 東福寺 五百羅漢図 十三号(拡大図)

(図31)に、明らかに太湖石が描かれている。また、南宋の金大受が描いた十六羅漢図も日本に伝わり、その中に十一尊者(図32)の後ろに太湖石も描かれている。その他、時代が少し降り、南宋の周季常と林庭珪筆「五百羅漢図」百幅本を原本にして、永徳3年(1383)より3年を費やして、東福寺の吉山明兆をはじめとする絵師たちが描いた「五百羅漢図」の中にも、第三号(図33)と第十三号(図34)に太湖石が描かれている。つまり、鎌倉と室町時代において、中国の羅漢図が数多く日本に伝わり、複製され、信仰されてきた。この時代において、『玄奘三蔵絵』の絵師たちも積極的に羅漢図から太湖石の描き方を学び、様々な異国風景に用い、享受者たちの期待に応えていることが推測できる。

四、『玄奘三蔵絵』の構成上における庭石の役割

まずは詞書の内容を補充して、より豊かなイメージを作る。巻一の第一段(図12)に描かれたのは、『孝経』を学ぶ少年玄奘である。詞書には、「大師の俗姓は陳といふ。漢の大丘の長、仲弓が後なり。祖父をば康といふ。学を以て齊に仕へて国子博士たりき。父をば恵といふ。又、経術に通じて、丈八尺なり」⁽²⁵⁾とあ

(25) 小松茂美等、続日本絵巻大成7『玄奘三蔵絵』上、中央公論社、1981、p. 188。

る。玄奘は読書人の家柄で、代々朝廷に勤めてきた。太湖石は富の象徴として、簡単に入手できない。ここでは、玄奘一家の地位をよく表すことができる。そして、唐太宗の皇居で、長安の新経書写の場面においても、極めて異状の太湖石が描かれている。つまり、太湖石などの庭石は人物の身分を間接的に表し、享受者の期待を答えている。

続いて、庭石は象徴的な意味を持つ。巻二第六段(図15)に描かれたのは、高昌国王が玄奘を強請する場面である。詞書には、「朕、……望まくは、一生の間、此处に留まりて、弟子が供養を受けて、西土に行く事なかれと。師、謝して曰く、……(中略)偏に求法の為なり。大王は昔の宿福によりて、今人主たり。願はくは障碍を為すことなかれと。……(中略)唯従ひ給へと高声に聞こゆれど、師、心強く誓ひて曰く、我、是まで来れる事、偏に求法の為なり。骨は譬ひ砕くとも、心は留まるべからずといひて、咽びて物宣はず。」⁽²⁶⁾とある。画面の右側には、高昌国王が目を大きく見張り、おごりたかぶって人を威圧する様子をしている。それに対して、玄奘は顔を俯け、高昌国王と視線を会わずにしている。絵巻を読む習慣に従い、更に左へ開くと、突然口を大きく開き、獅子頭をしている太湖石が飛び込んで、享受者たちを驚かせた効果があると考えられる。よく観察してみると、獅子頭をしている太湖石は玄奘と同じく左側に位置し、そして、獅子頭の視線は右側の高昌国王に向けて、相手を脅かす様子をしている。また、仏法においても、獅子は聖獣として全ての物を屈従させる力が蓄えている。この場面においても、獅子頭をしている太湖石は玄奘と同じく左側に位置し、求法の道を守る象徴として描かれている。

次に巻六第七段(図22)に描かれたのはナーランダー寺で正法蔵が玄奘に仏法の緒論を伝授する場面である。詞書には、「斯くて、諸論を伝授し給ふ事、「瑜伽論」三反、「順正理論」「顕揚論」「対法論」各々一反、……残る所無く、皆学し給ひければ、五か年をぞ送りける。」⁽²⁷⁾とある。画面には、口を大きく開き、巨大な獅子の形をしている庭石が描かれ、それは仏法伝授と深い関係があると考えられる。「瑜伽論」を求めるため、玄奘は労苦をいとわず、ナーランダー寺に到着した。よく観察してみると、庭石としての獅子は背が凹んで、まるで天上から降り

(26) 小松茂美等. 続日本絵巻大成7『玄奘三蔵絵』上. 中央公論社, 1981, pp. 197-198.

(27) 小松茂美等. 続日本絵巻大成8『玄奘三蔵絵』中. 中央公論社, 1981, p. 210.

た座騎のようである。そして、獅子は大乘仏教の文殊菩薩の座騎で、すべての邪悪なものを打ち負かす能力が蓄えている。『阿弥陀經直解正行』には「師子者。能伏羣獸。如文殊獅子。普賢白象。降龍伏虎之意。名喻獅子。遊行無礙。猶如世尊。凡聖獨尊。出入三界。自在無礙。如來說法。天魔外道無不信服。今表獅子一吼。百獸畏懼也。」⁽²⁸⁾とあり、獅子が咆哮したら、百獸をおびえる力がある。また、画面に描かれた獅子の形をしている庭石も口を大きく開き、咆哮をしているようである。「師子吼」は仏の説法を表し⁽²⁹⁾、『佛說阿羅漢具徳經』にも「烏波離長者是。住那爛陀城。能於衆會中談論師子吼」⁽³⁰⁾が記載されている。つまり、この場面に描かれた庭石は単なる装飾物ではなく、仏法伝授を隠喻し、それを守る役割も担っている。

最後に、全十二巻の絵巻は、玄奘の父の府邸に描かれた池と太湖石から始まり、西明寺の太湖石で終わる。庭石は庭の一景として、異国想像を表す。ここで問題になるのは、中国以外のところでも、太湖石が描かれた。特に迦湿弥羅国のフシュカラ寺やナーランダー寺は中国からかなり遠いところで、そこに描かれた太湖石はいずれも典型的な様子をして、中原地区の風景が西域地区や天竺にしばしば描かれたのは何故か。

筆者の考え方では、天竺が仏法の源としてつねに憧れる対象である。しかし、日本人が直接天竺と接触するのは難しいので、架け橋として重要な役割を果たしているのは中国である。遣隋使や遣唐使、又は民間の貿易により、中国は抽象的な存在ではなく、長い歴史の中に交流しながら、憧れてきた。鎌倉時代に、数多くの羅漢図が日本に伝わり、その中に、太湖石などの典型的な風景がしばしば登場する。絵師たちは無論中国に來たことがないので、異国風景を描く時は有限な絵画資料を最大限に利用しなければならない。しかし、どこまでが唐代中原地区の風景、どこまでが西域地区や天竺の風景に対する認識が曖昧である。享受者たちの異国に対する関心や憧れを答えるため、絵師たちは中原地区の風景をそのまま、或いは少し変容し、西域地区や天竺の風景に活用してきたことが窺える。

(28) https://cbetaonline.dila.edu.tw/zh/X22n0434_p0931c24?q=%E7%8D%85%E5%AD%90&l=0931c24&near_word=&kwic_around=30 最後閲覧：2024.06.07。

(29) 『例文 仏教語大辞典』の項より。

(30) <https://21dzk.lu-tokyo.ac.jp/SAT/satdb2015.php> 最後閲覧：2024.06.07。

おわりに

本稿は『玄奘三蔵絵』に描かれた庭石を研究対象として幾つかの問題を論じてきた。まずは鎌倉時代の絵巻における庭石を分析し、日本を舞台とする絵巻において、『作庭記』に記載されている内容と一致し、巨石はほぼ見当たらず、大部分の庭石は縁側より低い。そして、小川の流れに応じて、いくつかの庭石が点在している場合が多い。それに対して、異国を舞台とする絵巻における庭石は家のすぐ近くで単独的に置かれた場合が多いようである。また、石の高さも高低に拘わらず、穴がある太湖石を目立たせるように描いている。

次は『玄奘三蔵絵』における庭石について分析した。庭石を描く場所は唐代の中原地区、西域地区、天竺であるが、西域地区や天竺において、絵師たちは意識的に描き分け、一部分の庭石は中原地区の様式から変容したことが窺える。続いて、典籍の記載を踏まえながら、絵師たちは庭石の描写に工夫した原因を分析した。そして、絵画資料を辿り、絵師たちは中国から日本に伝わった羅漢図の影響を受けた可能性が高いと推測した。

最後は『玄奘三蔵絵』の構成上における庭石の役割と西域地区や天竺に屢々唐代中原地区の太湖石が描かれた原因を推測した。それは絵師たちの異国風景に対する認識の曖昧さや享受者たちの異国風景に対する憧れと深く関わっていると考えられる。今後の課題としては、『玄奘三蔵絵』に描かれた他の異国風景について考察していきたい。

参考文献

- 小松茂美等. 続日本絵巻大成9『玄奘三蔵絵』下. 中央公論社, 1982。
野村卓実. 解脱房貞慶と『玄奘三蔵絵』——貞慶作『中宗報恩講式』をめぐる. 文芸論叢/大谷大学文芸学会編, 2009 (73)。
李樹華. 中国における庭石と盆石の鑑賞法の形成とその定着について. ランドスケープ研究, 1996, 59 (5)。
外村中. 明末清初以前の中国庭園における太湖石について. ランドスケープ研究, 1995, 59 (1)。
刁慧琴. 『中国太湖石』. 上海科学技術出版社, 2008。
丹羽鼎三. 日本の庭石に就いて. 園芸学会雑誌, 1931, 2 (1)。
加藤悦子. 鎌倉時代末期に於ける宮廷絵所の研究 [博士学位論文]. 東京大学, 1994。

図版出典

- 図1 小松茂美等. 日本絵巻大成18『石山寺縁起』. 中央公論社, 1978。

- 図2 小松茂美等. 日本絵巻大成別巻『一遍上人絵伝』. 中央公論社, 1978。
- 図3-4 小松茂美等. 日本絵巻大成21『北野天神縁起』. 中央公論社, 1978。
- 図5-6 小松茂美等. 続日本絵巻大成13『春日権現験記絵』. 中央公論社, 1991。
- 図7-8 小松茂美等. 日本絵巻大成17『華嚴宗祖師絵伝』. 中央公論社, 1978。
- 図9 小松茂美等. 日本絵巻大成16『東征伝絵巻』. 中央公論社, 1978。
- 図10-11 真鍋俊照等. 『高野大師行状図画』. 大法輪閣, 1990。
- 図12、15、16、17 小松茂美等. 続日本絵巻大成7『玄奘三蔵絵』上. 中央公論社, 1981。
- 図13、14 小松茂美等. 続日本絵巻大成8『玄奘三蔵絵』中. 中央公論社, 1982。
- 図18-23 小松茂美等. 続日本絵巻大成9『玄奘三蔵絵』下. 中央公論社, 1982。
- 図24 中国古代書画鑑定組編. 『中国絵画全集』第1巻 戦国-唐. 文物出版社, 1997。
- 図25-26 鄭漢池, 刘彦軍, 申明清. 河南安阳市北关唐代壁画墓發掘簡報. 考古, 2013 (01): 59-68+2。
- 図27-29 三彩社編. 古美術 (80). 三彩社, 1986。
- 図30 亀田孜等. 新修日本絵巻物全集1『絵因果経』. 角川書店, 1977。
- 図31 国立文化財機構奈良国立博物館, 国立文化財機構東京文化財研究所編. 『大徳寺伝来五百羅漢図』. 思文閣, 2014。
- 図32 東京国立博物館が所蔵する「金大受筆／十六羅漢図軸」(機関管理番号: TA-298)を東京文化財研究所で1935年に撮影したガラス乾板。(<https://jpsearch.go.jp/item/cobas-176777>) 最後閲覧: 2024.06.17。
- 図33-34 石川登志雄編. 『重要文化財 東福寺五百羅漢図』. 勉誠社, 2023。